ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　マンションに着いたのは六時三十分。マンションを出たのが六時頃なので、三十分は走った計算になる。休みなく、その上結構な速度で走ったので、自分でも肩が激しく上下しているのが分かった。これはまだいい方で、ショッピングモールあたりまで走るルートだと、心臓が破裂しそうになる。樹葉には、朝練のウォーミングアップで、なぜそこまで全力疾走するのかと呆れられるが、これでも軽く流している方だ。ヤバイ時は、「心臓が破裂しそう」ではすまない。

「それにしても……」

　火照った体に、ひんやりとした風を感じながら、俺はマンションを見上げる。走り始めた時はどんよりとしていた空も、いつの間にか晴れていた。

　でかいマンションだ。

ここに初めて来た時もそう思ったが、二年以上もここで暮らしている今でも、時々思わずにいられない。この建物以上に高い建物はここら辺にはないから、余計そう思う。全三十階の高層シェアルームマンションは、この街の一種のシンボルになっていると言っても過言ではない。加えて、ここに住んでいる住人全員が『ワルキューレ』に所属しているのだから――もちろん、この事実を知っているのは『ワルキューレ』の人間だけだが――驚きだ。一つの階に五人用のシェアルームが十部屋あるので、単純計算で、このマンションには千五百人もの人が住んでいる事になる。もちろん空き部屋が何室かあるので、実際に住んでいる人は、確か千二百人ほどだが、それでも結構な人数だ。この人数で、実は『ワルキューレ』全隊員の一割にも満たないのだから、さらに驚きである。

　入口に置かれた指紋認証装置でマンションの中に入ると、俺は自分の部屋ではなく、地下へと向かう。このマンションの地下には格技場があり、俺の本格的な朝練は、いつもそこで行っているのだ。ちなみに俺達の部屋は、このマンションの五階の、５０９号室である。

　このマンションの住人なら利用出来る施設だが、格技場に無断で入る事は出来ないため、許可証をもらうべく、俺は格技場入口近くの受付に向かう。受付の男が、俺の存在に気づき、声をかけてきた。

「おっ、ロランじゃねぇか。おはよう」

　やや聞き取りづらいくらいに低い声だが、俺は何を言われたかを理解する。毎日似たような事を言われているので、推測は容易だ。

「おはようございます。格技場の使用許可をもらいにきました。お願いします」

　俺はそう言いながら、受付の人に『ワルキューレ』の会員カードを渡す。受付の男、マルクスさんは細い目をニヤリと笑わせると、カードをリーダーに通し、それを俺に返す。短く刈り込まれた髪は、歳のせいか、ところどころに白くなっているが、服の上からでも分かる鋼の肉体が、彼が戦闘において、まだ現役で活躍していることを告げている。二メートル近い背丈から、丸太のような上腕で振り下ろされる巨大なメイスの威力は凄まじく、一撃で大木をへし折るほどだ。おそらく俺が知る限り、純粋にパワーだけなら『ワルキューレ』の中で一番だろう。どうしてそんな人がここで受付などやっているのかは謎だが、マルクスさんは俺みたいなひよっこの指導係なので、多分その兼ね合いなのだろうと思う。

「ロラン、そういやおめぇ、今日から中学生だな。おめでとさん」

　格技場の扉の取っ手に手をかけた俺を呼び止めるように、マルクスさんはそう言った。決して感情表現が豊かな人ではない。常に仏頂面をしているので、俺も『ワルキューレ』に来て間もない頃は、近寄りがたい気持ちを必死に抑え、ここに来ていた記憶がある。声も聞き取りづらいので、指示を間違えて怒られることも、一度や二度ではない。個人的には、この世で一番おっかない人だと思う。さっき俺にニヤリと笑いかけてくれたが、そんな顔を見せてくれるようになったのも、実はつい最近のことだ。だが、今の声には、どこか安堵したような響きがあったように思えて、俺はつい、微笑んだ。

「ありがとうございます」

　俺は取っ手から手を離し、振り向いて頭を下げる。そんな俺に手招きをするマルクスさん。何かあるのかと俺が行くと、マルクスさんは二本の手のひらサイズの黒い輪っかを取り出す。持ってみると、それはゴムのようなものだった。かなり重い。俺は、これがなんなのか悟る。

「あの、もしかして……？」

「入学祝いだ。木刀用のウェイトリングっつって、今日から木刀の先っぽに、そいつを一本つけて素振りをするといい」

　そう言うマルクスさんの細い目の奥には、温かい何かが見えた気がする。それがなんなのか、俺は知らない。でも、悪いことではないのだろう。

「分かりました。大切に使います」

　そう言って、今度こそ俺は格技場に入る。

　東京ドーム半個分もある格技場だが、この時間はかなり人がいるせいで、あまり広さを感じない。木板が敷き詰められた床は、所々痛んでいる箇所がある。これでもひと月前に張り替えたばかりだ。

　俺は入口の近くに置かれているから、なるべく重めな木刀を一本取り出す。適当に振ってから、俺はさっきもらったウェイトリングを一本、言われた通り木刀の先っぽにはめる。少し持ち上げてみると、手にずっしりときた。

「……近いな」

　俺は部屋にある、二本の愛刀の重さを思い出しながら呟いた。

　俺は毎朝の素振りには、木刀を使っている。もちろん『ヘヴンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』で素振りしたいのは山々だが、何せ、どちらも『超』がつくほどの危険物だ。あまり人がいるところでは使えない。ほとんど実践でしか使ったことがないのが現状である。ここの木刀も充分重いが、あの二本の刀に比べれば、まだ軽い。それ故、未だに二刀の重さに慣れていないところがあったのだが、これなら周りに人がいても、あの刀で素振りするのと限りなく近い練習が出来るというわけだ。長さは二本の刀よりまだかなり短いが、今までに比べればマシである。

　マルクスさんに、心の中でもう一度お礼を言ってから、俺はある程度広めなスペースを探す。右側の隅っこにスペースを見つけ、そこに向かった。

「せいっ！」

　腹から声を出しながら、俺は素振りを始める。普段は練習効率を上げるため、俺は素振り以外の事は一切考えないようにしている。だが、こうして木刀が部屋の刀と似た重さだと、湧き上がるような興奮を抑えきれない。それと同時に、ふと俺は、自分の左隣を見て、一抹の寂しさを感じた。

「闘悟……」

　もしも、俺の友達……いや、友達だったあいつが俺の隣にいたら、何をしていただろうか。きっと今、あいつは俺の隣で、シャドウボクシングをしているはずだ。研修所では、いつもそうしていたから。いつもの、お気に入りの刺付きカイザーナックルをつけながら――

「いや……」

　そう思ってから、俺はを振った。こんな推測、無意味だ。

　結局、二年経った今でも闘悟の行方は分からない。絵里さんが出張に行ってから、リストの存在を知った俺は、木藤さんに聞いてみた。木藤さん曰く、どこのチームにも『闘悟』という名の男の子は所属していないそうだ。だが、試験合格者が集まる、あの部屋に確かに闘悟はいたわけなので、どこのチームにも所属していないなんてことはありえない。考えられるとすれば、名前を決めるあの時、闘悟が自分の名前を変えた、ということだろう。

別々の『チーム』になってしまったのは、仕方のないことだ。俺もあいつも、自分がどこに行きたいのか、話していないし、話せなかったのだから。覚悟はしていた。でも、なにも名前まで変える必要はなかったはずだ。これが意味することは一つ。そうまでして、あいつは俺と別れたかったのだ。もしもあいつと同じチームに入っていたら、友情の証として、俺がつけた名前を変えていたことがバレるからだ。俺と別れたい理由は分からないし、別に知りたくもない。でも、ムカついた。何が「方法なら、いくらでもある」だ。

とはいえ、あいつが俺の希望するチームを、どのようにして知ったのかは分からないが。

　どのみち、次に会った時は敵同士だ。何を寂しいと感じる必要があろうか。

　俺はそう思い、素振りを続ける。だが、胸に残る寂しさは消えない。無理矢理消そうとして、俺はさらに激しく木刀を振り下ろした。

　気づけば七時十分前。いつもならもう少し素振りを続けるが、この後シャワーを浴びる時間と、制服に着替える時間を考えると、そろそろ切り上げた方が良さそうだ。

　練習で出てきた汗に不快感を覚える中、俺は木刀を籠に戻すと格技場を出る。マルクスさんに、ウェイトリングのお礼をもう一度言って、自分の部屋に向かう。階段に出ると、マンションの入口から入ってきた冷気が、朝練で火照った体に心地よく吹きつける。五階に着く頃には、汗も引っ込んでいたが、同時にちょっと寒い。

「ただいま」

　自身の帰りを皆に伝えると同時に、俺は風呂場に直行する。さっさとシャワーを浴びて、さっぱりしたかった。風呂場は玄関を入って、リビングの手前を右に行くとある。脱衣所の戸は閉まっており、電気がついていた。誰もいない時は開いているし、もちろん電気もついていない。つまりこれは、中に誰か入っているということだ。

　キッチンから声が聞こえたので、樹葉は朝食を作っているはずである。少なくともここにはいない。レイは既にシャワーを浴びた。なので、俺はためらいもなく、脱衣所の戸を開く。

　当然というべきか、脱衣所には人がいた。誰か入ってきた事に気づき、そいつは俺の方に振り向く。

　栗色の髪の毛を肩のあたりまで伸ばしたセミロングにしたその子は、背丈は俺と同じくらいで、全体的に線が細い。華奢な体つきというべきか。こっちを見るその目はパッチリ大きく開いており、よく見ると左右で色が違う。いわゆるオッドアイというやつだ。俺から見て左側の目はダークブラウンで、右側の目がダークヴァイオレットである。

だが、特筆すべきは、見とれるほどきめ細かく、ツヤツヤな白い肌だろう。なぜそんなことが分かったかというと、その子は下にはいている最後の一枚を除いて、全ての衣服を脱いでしまっているからだ。もうシャワーを浴びた後なのか、それともこれから風呂場に入るのかは分からないが、俺は後者だと推測する。その手には衣服を抱えているが、どう見てもたたまれておらず、いかにも今脱いだばっかりという感じだからだ。多分、俺のすぐそばにある洗濯機の中に放り込む寸前なのだろう。髪の毛も濡れた様子がなく、キューティクルの力か光沢がある。まあ最も、この子の髪の毛はすぐ乾くので、これを判断材料にするのは危険だが。とは言え、もうすぐ風呂に入る準備が整う、といったところで、俺が入ってきてしまったわけだ。

これがラブコメの小説や漫画、アニメやドラマなら、即座に顔面に拳の一撃でもきて、俺の視界がブラックアウトするところなのだろう。だが、その子は俺の存在を気にする様子もなく、むしろ笑顔を見せる。それも当然。

この子は男の子……いや、男の娘だからだ。

それを知っているので、俺も今更、裸を見たくらいではときめいたりはしない。

彼女、いや彼は。由来はもちろん、研修生番号の下二桁が『４３』だったからだ。

「ロラン、おはようございます。これからシャワー浴びるんですか？」

　丁寧語で話すその口調は、まだ平均的な女子の声の高さと比べると低いが、男にしては高すぎる声で、詠は挨拶をする。冗談抜きで、よくよく聞かないと女に間違えそうなレベルだ。名前も、男にも女にも使える名前なので、女と偽っても、誰も疑いを持たないだろう。事実、俺も最初に自己紹介されるまで、ずっと女の子だと思っていた。

　ちなみに詠は、誰に対してもこんな喋り方である。二年近くも一緒に住んでいる俺達にさえ、だ。

「そのつもりだったけど、お前が先に入るなら、俺は後にするよ」

　詠が風呂から上がったばかりなら、この後すぐ入るつもりだった俺は、そう答える。フィフティーフィフティーの確率で俺は風呂に入れるのだが、今日はどうやら失敗したらしい。ちなみに、「今日の運試し」も兼ねた賭なので、失敗した日には、俺はいつもより控えめに行動することにしている。

「あれ、でも時間大丈夫ですか？」

　脱いだ服を洗濯機に入れながら、詠は首を傾げる。時計を見れば、確かに詠がシャワーを終えるのを待っている暇はない。だからといって、シャワーを浴びない選択肢を選ぶのも、なんか嫌だ。

　どうしようかと思っていると、詠は少し悩むような顔を見せた後、風呂場と俺とを交互に見る。そして、口を開いた。

「時間ないんだったら、僕と一緒に入りません？　僕も、まだなんです」

　そう言われ、今度は俺が風呂場と詠を交互に見る。どうやら、さっきの運試しで失敗した影響が、さっそく出たらしい。

　どう返答しようか迷った、その沈黙を肯定と捉えたのか、詠は俺に笑顔を見せ、風呂場に入る。詠と一緒に風呂に入るのは、これが初めてだ。というか、俺は『ワルキューレ』に入ってから、風呂は毎日一人で入っている。

「……仕方ないか」

　時間がないのも事実なので、俺も服を脱ぐ。せめてもの抵抗として腰に白いタオルを巻いたものの、詠が全裸で風呂場に入ったので、あまり変わりはない気もする。

　いや、俺が抵抗したという、この事実が重要か。

　言い訳を試みる俺の耳に、風呂場の中から水がタイルをうつ音が聞こえた。同時に詠が鼻歌を始める。スライド式ガラス戸に手をかけた俺だが、そんなものを聞いてしまっては、開くのが躊躇われた。

相手はどうせ男。何を躊躇う必要があるのか。それに脱衣所で、詠の裸を既に見ている。問題はないはずだ。そう自分に言い聞かせ、俺はガラス戸をスライドさせて、中に入った。

白い湯気が視界に勢いよく広がるが、うっすらと中の様子は分かる。広めのスペースはベージュ色のタイルが床に敷き詰められ、奥には二人用の湯船がある。朝はシャワーしか使わないので、お湯は入っていない。

詠は既にシャワーを浴びていた。気のせいか、肌や髪の毛を滴る水が色っぽい。こうして見ると、改めて、詠が女っぽいと実感する。

「……お前、ほんと女みたいだな」

　つい声にも出てしまう。それを聞いた詠は、ちょっと頬を膨らませる。

「僕、男です。断じて女じゃありません！」

「いや、それは分かってるんだけどさ……」

　このまま詠のシャワーシーンを見ているのも悪い気がして、俺はつい目をそらす。

「なんというか、詠って下手な女子より女っぽい、っていう意味で――」

　俺がそこまで言った瞬間、四十度に設定されたお湯が、俺の顔に勢いよくかかる。俺は思わず仰け反る。そのせいで、息がしづらい。

「ちょ……おまっ、息が……」

「そんなこと言う人には、シャワー貸してあげません」

「ちょっ、それは……困る！」

　容赦なく浴びせられるシャワーに、仰け反りから回復し、ようやく息を吸えた俺は叫ぶ。ニヤニヤ笑っている詠の手からシャワーをひったくろうとするが、詠は俺の手をひょいひょいと躱す。

「た……頼むから、シャワー貸してくれ……！　髪洗いたいんだって！」

「じゃあ、洗ってあげましょう」

　シャワーが止まり、ようやく俺はちゃんと息を吸い込む。湿度が高い風呂場の空気が、肺にへばりつくようだった。

「いや、別に……」

「いいからいいから」

　落ち着いた俺は、再びシャワーからお湯を出す詠を手で制したが、それを無視して、詠は今度は俺の頭にシャワーをかけた。

「ほら、頭上げて。ちゃんと洗えません」

「わ……分かったよ」

　俺の頭皮に、詠の指が優しく触れる。洗うために、髪の毛を濡らしているのが分かった。この際、もうシャワーを浴びられるだけでもよしとしよう。

俺は観念して、頭を上げる。詠はクスリと笑って俺の頭から手を離す。シャワーを止め、鼻歌交じりにシャンプーを少し手のひらに乗せて、軽く泡立ててから俺の髪の毛に落とした。今度はひんやりとした感覚が、俺の頭皮にゆっくりと広がる。

「なんか……恥ずかしいな」

　爪を立てず、指の力だけで俺の髪を洗う詠に向かって、俺は思わずそう呟いた。顔を伝って口に入りそうになった泡を払いのける。「僕も」という小さな声が後ろから聞こえた。

そう思うなら何で俺の髪を洗っているのだろうか、という疑問を口にしかけたが、その前に発した詠の次の一言が俺を黙らせる。

「これ終わったら、次はロランが僕の髪を洗ってください」

「はぃ？」

　思わず素っ頓狂な声で語尾を上げてしまった。

「いや、ちょっと……なんだって？」

「あっ、洗うときは、爪立てないでくださいね」

「待て待て待て」

「確かに恥ずかしいけど、僕、友達とお風呂一緒に入って、洗いっこするの夢だったんですよ？」

　どうやってこの状況を回避しようか悩んでいた俺に、嬉しそうな詠の声が聞こえた。やがてその声は、しんみりとしたものに変わる。それでも、俺の髪を洗う詠の手の動きは止まらない。

「僕、未だに信じられません。こんなことができるなんて」

「……大げさな奴だな。危険な任務は何回かあったかもしれないけど、近くにマルクスさんもいたわけだし」

　そう呟く俺の後ろで、詠が首を横に振るのが分かる。シャワーからひと雫の水滴が落ち、やけに大きな音を立てた。

「そうじゃないんです。なんか……うまく言えないけど、そういうことじゃなくて……」

　詠の指が、僅かに震える。髪の上からでも、それが分かった。

「ええっと……僕達が離れ離れになってしまう、そんな恐怖を感じた……っていうことかな？　ロランや樹葉、レイが僕から離れていくような……ごめん、上手く言えないです」

「独りぼっちになるってか？　変なやつだな。あの二人が、お前から離れていくわけないじゃないか。俺は……」

　もしかすると、と言いそうになったのをグッとこらえ、どもりかけたのを誤魔化すように、俺は早口で続ける。

「別にどっか行く予定もないし、ましてや死ぬつもりも毛頭ない。心配せずとも、独りになんてならないって」

　小さな刺が刺さるような罪悪感を感じるが、あながち嘘ばかりではないと自分自身に言い聞かせる。少なくとも樹葉やレイは、詠の前から突然いなくなることはないだろう。俺についてもそうだ。しかし、もし目の前に闘悟が現れたら、正直どうするかは分からない。

　詠は「そうだね」と小さく呟くと、しばらくの間、黙って俺の髪を洗っていた。ただ髪の毛同士が擦れ、泡が立つような音だけが聞こえる。詠がさっきの俺の発言に対し、どう感じたのかは分からないが、心の底から納得してくれた気はしない。

　黙ったままの空気に気まずさを感じ、どうしようかと思っていた俺だったが、唐突に発せられた詠の発言が、やけに長く感じた沈黙を破る。

「ロラン、中学校入学おめでとう」

「……お前もな」

「ふふっ、学校は違いますけどね。あっ、泡流します。目、瞑っててください」

　そう言われ、俺が目をつぶると同時に、再びシャワーの音が聞こえる。温かい液体が頭皮を伝う感覚の後に、詠の指が当たるのが分かった。

　泡を全て流し終わったのか、詠がシャワーを止める。

「はい、次はロランですね」

　そう言って詠は、俺にシャワーを渡す。正直気が重い。もし逃げることが許されるなら、とっととこの場から立ち去ってしまうだろう。

　詠に聞こえないように細く息を吐き、俺はノズルを回す。人の髪を洗うのはこれが初めてなので、いまいち勝手が分からない。取り敢えず詠がやっていたように、シャワー立てにシャワーを引っ掛け、髪に上手くかかるように位置を調節してみる。

「……ここら辺か」

　洗いやすそうな位置を見つけ、俺はそう呟いた。自分の髪を洗う時と同じような感じで、俺は詠の栗色の髪の毛に指を突っ込む。

　だが俺が予想するより早い位置で、詠の頭皮に俺の爪がぶつかる。

「……痛っ」

「あ、悪い！」

　反射的に詠の頭から指を引っこ抜く。今度は恐る恐る、詠の頭の形をイメージするように、髪に指を入れてみた。頭皮に指の腹が当たったが、今度は詠も痛がらない。念のために聞いてみる。

「……こう？」

「あ、はい。そうそう、うまいです」

　嬉しそうに詠はそう答えた。ホッと一息ついて、俺はそのまま詠の髪を濡らす。その後、詠と同じようにシャンプーを少量手のひらに乗せ、手のひらで軽くこすり合わせてから詠の髪を洗い始める。

「……なあ」

「どうしたんですか？」

「女に見られるのが嫌なら、どうしてもっと男っぽい髪型にしなかったんだ？」

　髪を洗っている最中、ふと沸いた疑問を俺は詠にぶつける。線が細いとは言え、詠も立派な男である。髪型さえ変えれば、男の娘ではなく普通の美少年にも見えるはずだ。

　詠は少しの間黙り込む。もしかして聞かれたくない事だったかと、俺は嫌な予感がした。慌てて話題を変えようと俺は口を開いたが、言葉を発するのは詠の方が先だった。

「理由……ってほどでもないんですけど、レイや樹葉が、こっちの方が似合うって言ってくれたから、かな。そう言われると、この髪型でもいいかなって思ったんです」

「……へぇ」

　開いた口から出た言葉は、自分でも分かるくらい間抜けなものだった。行き場をなくしていたとは言え、これはひどい。

　わざとらしく咳払いをして、俺は詠の髪を洗う。

「……ええっと、こんなもんでいいか？」

　泡にまみれた頭を見ながら、俺は詠に聞く。おそらくもう充分だろう。

　詠はちょっとだけ自分の髪を撫でた後、満足したように頷く。俺は泡を洗い流し、シャワーを元の場所に戻した。

「ロラン、ありがとう。またよろしくお願いしますね」

　正直、もう二度とやりたくはないが、嬉しそうな詠の顔を見ているうちに、俺はいつの間にか頷いていた。